

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあんまりじょうずでないという評判でした。じょうずでないどころではなくじつはなかまの楽手の中ではいちばんへたでしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。トランペットはいっしょうけんめい歌っています。クラリネットもボーボーとさし

バイオリンも二いる風のふり。

ゴーシュも口をのしなすに唄っています。

にわかに、ぱたと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめました。目をさらのようにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

「セロがおくれた。トオテテ、テテテイ、楽長がとなりました。」

みんなは今のところの少し前のところからやり直し。はいっ。

「セロっ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはない、みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの替りたてた。ほつと安心しながら、つづけてひいていきますと、楽長がまた手をぱとうちました。」

「セロっ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはない、みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの替りたてた。ほつと安心しながら、つづけてひいていきますと、楽長がまた手をぱとうちました。」

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていっしょうけんめいです。そしてこんどはかなりすすみました。いいあんばいだと思っていると、楽長がおどすような形をして、またぱたと手をうちました。またかとゴーシュはどきつとしました。が、ありがたいことにはこんどは人でした。ゴーシュはそこで、さつき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づけて可かき

「だめだ。まるでなっていない。このへんは曲の心臓なんだ。そんばーん、音楽を専門にやっている僕らが、あのまじで、どなりだしました。」

よ。音楽を専門にやっている僕らが、あの金靴鍛冶だの砂糖屋のでっちなんかのよりあつまりに負けてしまったら、いったいわれわれの面目はどう